『ほうねんき』から『善だう記』へ

――寛文の播磨掾――

沙加戸　弘

はじめに

寛文六年、『ほうねんき』[1]を上演し、伊藤出羽掾とも〳〵真宗関係浄瑠璃に新局面を開いた井上播磨掾は、その第二作として、寛文十年『善だう記』[2]を上演した。

善導も、法然と同じく真宗七高僧の中の一師であり、また法然が善導に帰したことは周知の事実である。『無量寿経釈』[3]には

「正依善導」

とあり、『往生要集釈』[4]においてさえ、

「然則用恵心之輩　必可帰善導道綽也」

と述べている。してみれば、播磨掾が法然の次に善導をとりあげたことには、十分な必然性があったことになる。が、問題はそれにはとゞまらない。なぜならば『善だう記』は、『ほうねんき』と大きく異なっているからである。

もとより、寛文六年の『ほうねんき』は、真宗関係の素材に深い関心をよせながらも、東本願寺からの異議申立によって、親鸞を描くことまゝならぬ、という状況におかれた播磨掾が、親鸞の弟子平太郎を素材とした[5]伊藤出羽掾に対抗して開拓した七高僧伝浄瑠璃の第一作である。従ってその内容は、

一、真宗関係浄瑠璃でありながら、
二、不自然な程親鸞の事蹟に及ばない、
三、首尾一貫した法然の伝記浄瑠璃

であった。このことは以前、いさゝか論述したとおりである。[6]

この『ほうねんき』における播磨掾の親鸞離れが、一時的なものであることは、播磨掾の、真宗関係の素材に対する並々ならぬ関心の深さから容易に推量できるところである。さらにそのことは、第二作である『善だう記』の内容を考察することによっても知られる筈である。

本小稿は、さま〳〵な制約の中で、播磨掾が『ほうねんき』で表面上離れたように見せかけた親鸞関係の素材を、どのような方法で再びとり入れたか、さらにそのことから、いかに播磨掾が真宗関係の素材に執心したか、ということを、『善だう記』の内容を検討することによって明らかにしようと試みるものである。

一　『善だう記』大略

まずはじめに、論展開の都合上、やゝ煩しくなるが『善だう記』の大略を追ってみよう。

第一　隨の煬帝の皇后「せいりやうぶにん」が急病で倒れる。治療を命ぜられた医師「かいせうこじ」は、薬を調製するため、長安の瀧まで水をくみに出る。その時、瀧は「ぜんだう〳〵」と響き、音楽聞こえ、幡が二旒降り下る。瀧の内から「まつほうしゆつせ、めうぜんだう、そくせみたけしん、ぶつちよくせ、まつ代だうあく人、一さいしゆじやう、いわうじやうと」の声が聞こえてこの文が二旒の幡にすわる。

とらの刻、水をくもうとすると、瀧水の上に「さいはうごくらく、みだ佛しゆつしやうしんだんみやうぜんだう、くわんげす万、せんあく人、一さい衆生　いわうじやうと」の文がうかび、水の中から五、六才の童子一人忽然と現われ出、「かいせうこじ」の問に答えて「むかしは西方に有て、六八のぐはんのをこし、今まんぞくして、とうどにけげんす、天をもつて父とす、ちをさしては母とし、水をもつてたいないとす　我は是、西方ごくらくの、きやうしゆ　あみだ佛の、けしん也、けちゑんの衆生、すぐに、ぶつしんを、ゑせしめんため、今爰に來れり、なんぢ我を、はごくむべし」と言う。

時に隨の煬帝の大業九年であった。

第二　「かいせうこじ」の調製した薬で皇后は全快する。童子出現を奏上すると、伴って参上せよと勅諚がある。皇帝の問に、童子は筆を虚空に投げる。筆は自ら傍の障子に立ち、「くはうみやうへんしやう、十方せかい、ねんぶつ衆生、せつしゆふしや」の文を書く。

「かいせうこじ」に養育された童子は、十一才の春出家を望む。「かいせうこじ」はひきとめるが、道理を説かれて翻意し、「とても山上あるうへは、さとの事をも打わすれ、よきにがくもんとけ給へみ申みへたき、折ふしは、是より人を、のぼすべし、それまでは、ふみのたよりも、いたすまじ」と送り出す。

童子は「かくしやう山」に登り「ごんじやのほまれ」高き、曇鸞大師の御弟子道綽禅師に入門、十三才で出家を遂げ、出生の時の瀧の響きに因んで善導と名付けられる。

善導は修行を重ね、『観無量寿経』に至って浄土門に入る。

第三　善導が一七日の別時念佛を修した時、難産で死亡し血の池地獄に堕ちた女人の霊魂が迷い出て助けを求める。善導は「ごくぢう悪人、むたほうべん、ゆいしやうみだ、とくしやうごくらく」と十念を授けて済度する。

そこへ、養父の弟子「しやうじゆん」から、「かいせうこじ」が危篤である。という文が来る。善導は道を急ぐが、臨終には間に合わない。善導は、「とび立程におもひしかど、つね〳〵こじの、の給はく　此方よりゆるさずは、さとへ帰る事なかれ、只がくもんのしゆぎやうせよと、ふかくせいし給ふにより、御ゆるしなき内に、はゞかり、いかゞとぞんし、此たびの御りんじうに、あはざる事のかなしや」と悲しみにくれ、さらに、「あひべつりくを、なげくにあらず、かくて有ながら、御りんじうの其みぎり、御めにかゝらぬ事共は、生々世々のふかう也、じやうがう、かぎりのうへの、命をねがふ事はなし、只りんじうの一大事を、すゝめ申さんためなれば」と念佛する。十念おわらぬ内に「かいせうこじ」は蘇生し、善導の引導によって、本願をたのみつゝ、音楽聞こえ花降り異香薫ずる中に往生を遂げる。

第四　華厳宗の高僧「こんがうほつし」をはじめとする諸山の学匠、善導の広むるところ正法ならずと奏上、「さいみやうじ」において問答することとなる。善導は数多くの学匠の批判を悉く論破し、重ねて、我勧むるところ「あやまりなくば、諸佛、しよぼさつ、かんのふあつて、一つのきずいをみせしめ給へ」と念ずると、「玉たう」の仏舎利が如来の姿と現じ、

仏壇の木像は赫奕とかゞやく。虚空から「ぜんだうのすゝめ、まもるべし〳〵」と声あって、仏舎利はもとにもどる。

これによって諸師皆悉く善導の弟子となった。

第五　善導の教化天下に普く、念佛は全土に広まる。善導六十九才に至り、臨終の近き事を知り、末世の衆生利益のため、赤栴檀の御かげを作する。

一七日の説法おわって、唐の高宗永隆二年三月十四日、奇瑞の中に、無量の諸佛諸菩薩に引接されて善導は往生を遂げる。

二　『善だう記』の性格

以上の大略を追って明らかなとおり、この『善だう記』の中には、真宗及び親鸞関係の素材がいくつもちりばめられている。そのいくつかを指摘してみよう。

まず第一に、この作において善導が水中から出現したとされる時刻「とらの刻」。これは『本願寺聖人傳繪⑦』上巻第三段及び同第四段の夢想の刻と一致する。さらに『正像末和讃⑧』冒頭の夢告の刻とも一致する。

「寅の刻」は、夢の刻として、奇瑞の刻として、あるいは一般的であったかも知れないが、真宗関係の文献に存在しかつそれが拝読・諷誦されていたことからすれば、この時刻が真宗門徒に耳馴れていたことは確かである。

次に、童子すなわち後の善導が出家・上山する際、養父「かいせうこじ」は、

「とても山上あるうへは、さとの事をも打わすれ、よきにがくもんとけ給へ　み申みへたき、折ふしは　是より人を、のぼすべし、それまでは、ふみのたよりも、いたすまじ」

と送り出す。「かいせうこじ」は後に、自分の弟子の手になる手紙で呼びもどされた善導と奇跡の対面を遂げ、引導されて往生する。

ここに源信僧都の俤があることは明白である。『今昔物語集⑨』に語られる源信は、「三條ノ大后ノ宮ノ御八講」に召され、「給ハリタリケル捧物」の一部を大和の母の許に送ったところ、「嫗ノ心ニハ違ヒニタリ」と諭され、籠山して修行に励んだ。七年目、合いたいと母の許へ手紙を送ったが

「此レヨリ不申（マウサ）ザラム限リハ不可出給（イデタマフベカラ）ズト」

という返事を受けた。一層修行に励んで九年目、心おさえ難く故郷へ出立したところ、母危篤の手紙を持った使者と行き遇い、母の臨終に念佛を勧めることができた、というものである。当然の事ながら手紙は「尼君ノ手ニハ非（アラ）ざ

るものであった。

この説話が、『善だう記』のこの部分に影響を与えていることは、ただ単に展開の相似によってのみ証明されることではない。

すなわち、善導の出立・上山と「かいせうこじ」の臨終にはさまれた第三の冒頭、善導が難産によって死亡した女人の霊魂を済度する場面は、

「大しふびんにおほしめし、あふやさしくも來る物かな、汝くはこの、しゆくゑんにあらずんば、いかで此たうじやうに來るへき、まさに卅五ばんのぐはんもん、今汝らがためならん、ごくぢう惡人、むたほうべん、ゆいしやうみだ、とくしやうごくらく、なむあみだぶつ〳〵と、十念さづけ給ひければ　女しやう、かんたんずいきして、なむあみだ佛の　聲もろ共に、あさましきすがたを引かへ、れいこんたちまち、ぶつたいと也、西のそらに、とびさりしは　有がたかりける次第也」

と語られている。改めて述べるまでもなく、「極重悪人無他方便　唯称弥陀得生極楽」は、『往生要集』[10]巻下「大文第八」を原拠として、『宝物集』、謡曲『柏崎』・『卒都婆小町』等を経て人口に膾炙した一句である。第二から第三にかけての善導は、源信に重ね合わされていること明白である。

今一つ、弥陀如来の来現として出生、養父の許から出家を願い、誉高い名僧に入門する、という展開には、『本願寺聖人傳繪』における親鸞の「出家学道」の俤があることを指摘しておきたい。

次に、童子が出家し善導となる場面には、

「かくて其後、御ちごは、かくしやう山に成しかは、其比しゝうののふけ、ごんじやのほまれを取給ふ、どんらん大しの御でし、どうしやくぜんしに、たいめんまし〳〵、していのけいやくなされける、則御年、十三にて、御ぐしをろさせ給ひける――中略――則ぜんだう大しと付給ふ」

とあり、曇鸞・道綽・善導と、真宗七高僧のうち震旦の三師の名が一挙に語られる。

次に、第四、善導が華厳宗の高僧「こんがうほつし」を始めとする諸山の学匠と問答に及び、悉くこれを論破する場面は、前作『ほうねんき』の、法然の南都東大寺における説法、及び「大原問答」を想起させる。重ねて、その結び、善導の念佛に応じて示される奇瑞の場面には、

「ふしきや、玉たうにこめをき給ふ、御しやり、はる

かこくうに、とびさり給ひ、たちまちによらいの、すかたをけんし、ひかりをはなつて、おがまれ給ふ　中にも、ぶつだんの、もくざうは、くはうみやうかくやくと、てらし給へば、いきやうくんじて、花ふり、こくうにみこゑあつて、ぜんだうのすゝめ、まもるべし〳〵、ぜんざい〳〵、うたがふ事なかれと、あらたに御つげまし〳〵て、ぶつしやりは、たちまちに、もとのことくに、玉たうに入給ふ　此時の有さまを、今日本、本願寺のかいさん、しんらん上人、ぜんだうとくみやう、ぶつしやういと、しやうしんげにしやくし給ふ是也」

とあり、親鸞が善導を七高僧の内の一師と仰いだ、という視点から親鸞及び『正信念佛偈』の名が語られる。

もう一箇処、今度は念佛の教えの流れという逆の視点から、親鸞の名が出る。第五における、善導の臨終に際しての説法の部分に、

「此三心四しゆのゑかうは、我てう念佛のぐはんそ、ほうねん上人、とくだう有、じきしつ、くんほつ、おうそう、げんさう　此四しゆを、二つにわけ、わうさう、げんさう、二しゆのゑかうを、念佛一かう、もつはら、しゆしますゆへ、則しんらん上人に、御ふぞくある」

とある。つまり、曇鸞・道綽と伝燈されて善導に伝えられた念佛の教えは、法然を経て親鸞に受け継がれ、結果として親鸞は七高僧の一師として善導を仰いだ、ということになる。

さらに、第二において、臨終をひかえて善導が、自らの木像を作する場面がある。

「されば我世めい、七しゆんにおよべり、りんじうの程ちかゝらん、我すがたを、もくざうにうつし、まつせの衆生をりやくせんと、しやくせんだんのみそぎをもつて、みづから御かげを作り給ふは、有がたかりける次第也、かくて御かげ、ざうりう有て、ぜんだうなゝめに思召、かうざにうつし、かうげをそなへ、我めつごには、必一さいしゆじやうを、我に替て、りやくあれ、なむあみだ佛〳〵と、十念まします、其時ふしぎ成かな、御かげ、ぜんだうもろとも、がつしやう有、あひ十念をふそく有　きたひやける次第也」

この趣向は、播磨掾が自らの先行真宗関係浄瑠璃『浄土さんたん記并おはら問答』[11]（以下『さんたん記』と略称する。）で使用したものである。すなわち、『さんたん記』第五、五条西洞院の御堂が建立されて後、親鸞は自らの画像を製

作する。

「かくてその〻ち、上人は、まつせのしゆしやう、りやくのため、御すがたを、か〻みにうつさせ給ひつ〻、みづからみかけを、つくらせ給ひ、ふつぜんになをし、かうけをそなへ、ごゑいにむかつて、のたまふやうわがめつごには、かならず、いつさいしゆじやうこと〳〵く、りやくをなして、すくひ給へと、しはらく、らいはいなされつ〻、すでにほうしを、なし給ふ」

木像と絵像との違いこそあれ、自らの像を作し、香華を供え、我滅後には我にかわって一切衆生を利益あれと念じ、それに応じて自作の像が奇瑞を示す、という趣向は全く同じである。

『善だう記』の結びの部分に、『さんたん記』の同じ場所の趣向を使用した、ということは、『善だう記』を以て『さんたん記』の、さらに言えば親鸞伝浄瑠璃の代償作とする意識があった、とまでは言えないにしても、少くともこの場面は、『さんたん記』を想起させるに十分である。その意図はあった、と見るべきであろう。

以上、述べ来ったように、この『善だう記』には、多くの真宗及び親鸞関係の素材が組み込まれている。そのことは、この作がただ単に善導の伝記浄瑠璃にとゞまるものではないことを示している。逆に、表面善導を描きながら、その実ねらいは少しく別のところにあったと見るべきである。

すなわち、この作『善だう記』は、大略に明らかなとおり、表面上善導の一代記の形式をとり、冒頭に述べたように前作『ほうねんき』の単なる延長上にある如く見せかけながら、中に多くの真宗関係素材をちりばめ、さらにさりげなく親鸞の名を織り込んで、言わば親鸞につながる念佛伝燈の祖師概説とも言うべき性格を持った作、『ほうねんき』から大きく踏み込んだ真宗関係浄瑠璃となったのである。

三　結び

『ほうねんき』で表面上親鸞関係素材から離れたように見えた播磨掾が、第二作『善だう記』で見せた方法は、数多の祖師の名や俤を、善導一師の伝記浄瑠璃の中に盛り込む、というものであった。

そこには、体重を七高僧伝に残しながら、一旦離れたと見せかけた親鸞伝に少し足を出し、どこまで踏めるか試みる、という姿勢をうかゞうことができる。

そしてそれは、『ほうねんき』と『善だう記』の、真宗

及び親鸞関係素材への踏み込みぶりの差から見て、その方向性は最早明らかなように、名実共に備えた真宗関係浄瑠璃――親鸞伝――にもどるための試行であったと考えられる。

そこに、一歩でも、半歩でも、真宗関係浄瑠璃の本筋――親鸞伝――にもどろうとする、播磨掾の執心を見ることは見当外れではないと思われる。

本小論では、播磨掾の上演作の前後関係だけに焦点を絞って考察したが、このあと播磨掾は寛文十三年四月、二河白道で伊藤出羽掾と競演する。出羽掾の道筋をも辿りながら、この競演を解明することを発展課題としたい。

註

①『古浄瑠璃正本集　第四』による。
②『　同右　　第五』による。
③『日本思想大系　10　法然　一遍』による。
④同右。
⑤『よこぞねの平太郎』（『古浄瑠璃正本集　第四』所収）。
⑥大谷大学文藝学会刊「文藝論叢」第二十九号所収　拙稿「寛文六年の出羽掾と播磨掾――『よこぞねの平太郎』と『ほうねんき』をめぐって――」
⑦東本願寺出版部刊、複製庚永本による。
⑧『日本古典文學大系　82　親鸞集　日蓮集』による。
⑨『同右　　24　今昔物語集　三』による。
⑩『日本思想大系　6　源信』による。
⑪『古浄瑠璃正本集　第四』による。

なお、本年度、大谷大学真宗総合研究所より「浄瑠璃の仏教的研究」のテーマで個人研究費を交付された。本稿はその成果の一部である。

（本学専任講師　国文学）